

私は昭和町で開業して18年
たつ小児科医です。開業のき
つかけは、当時整備されてい
なかつた小児救急医療を少し
でも構築したいという思いか
らでした。そのため開業後の
5年間は、有志の小児科医ら
と共に夜間休日の診療に明け
暮れる日々でした。現在は私
提言を大切に仕事と向き
合っています。

新型コロナウイルス禍によ
る自粛ははや2年が過ぎ、子
どもたちは園・学校でマスク
をつけて、手洗いもしっかり
としながら感染対策をしてい
ます。併せて、とても楽しみ
にしている園・学校のさまざま
まな行事や部活動が中止や縮
小となつています。多くの子
どもたちが、学校での楽しみ
は休み時間・給食時間です。
校庭で存分に友達と遊ぶこと
も制限され、給食時間も黙食
を徹底されています。目には
見えないけれど、子どもたち
に必要とされるさまざまな経
験が失われました。

時標

が小児科医院を担当、妻が隣
地で認可こども園の園長とし
て医療と保育両面から子育て
支援に関わらせていただいで
います。

所属する日本小児科学会で
は、「小児科医は子どもたち
の代弁者としての役割を果た
す子どもの総合医である」と
提言しており、私自身もこの

私の診療では、コロナによ
る感染対策の効果によりさま
ざまな感染症は大幅に減つて
いますが、頭痛・腹痛などの
不定愁訴を訴え受診するお子
さんが明らかに増加していま

感染対策・子どもの日常 両輪で

す。連日のコロナ感染関連の
報道で目・耳をふさぎ、おび
える子どもたちがいます。子
どもは大人よりも何倍も不安
を抱きます。そのためご両親
にはコロナ関連のメディア情
報や会話を避け、子どもたち
を安心させる配慮をお願いし
ています。

口から子どもに虐待してしま
うケースなども経験していま
す。また、コロナ禍で子ども
たちの自殺者が2010年度
と比較して、20年度は2.7
倍増加していることも問題に
なっており、子どもたちは精
神的にも肉体的にも追い詰め
られています。

最近の報道では新型コロナウイルス
の感染症法上の位置
づけを、結核や重症急性呼吸
器症候群（SARS）並みの
危険度が高い「2類」から季
節性インフルエンザと同じ
「5類」に引き下げる意見が
与野党から出ており、感染対
策のバランスを検討する時期
にきていると感じています。



宮本 直彦
げんきキッズ
クリニック院長

コロナ前から続く保健室登
校のお子さんは感染対策で保
健室が利用できなくなり、不
安により親から離れられず不
登校になった子、外遊びが減
り家に閉じこもりがちになり
肥満になった子、ストレスか
ら給食が食べられなくなる
子、家族が家にいる時間が長
く親もストレスを抱え、はげ

今年に入ってから新型コロナウイルス
（第6波）
は新規感染者のうち10代以下
の子どもの割合が全体の約3割
を占め、身近になってい
ます。今年から二十数
人の子どもが熱などの症状で
コロナに感染しました。罹患
した多くのお子さんの経過は
2日間ほどの熱は出ました
が、その後回復し、風邪と似
たような経過で、インフルエ
ンザよりも軽い印象でした。
第6波はオミクロン株が主
体で感染力がかなり強いが、
重症化率が低いと言われてい
います。

子どもたちの行動制限
がこれからも同様に継続され
ると、コロナ罹患よりも精神
的な負担の方が気になりま
す。

選挙権のない子どもたちの
メッセージは世の中に届きづ
らいかもしれませんが、子ど
もたちはやがて大人になり、
将来私たちを支えてもらう立
場になる社会の宝です。子ど
もの代弁者として、感染対策
と子どもの日常の両輪を再考
していく時期にあるのではな
いかと痛感しています。

みやもと・なおひこさん

1969年生まれ。千葉県出身。山梨医科大（現山梨大）医学部卒業後、医学博士取得。加納岩総合病院小児科医長を経て、2004年にげんきキッズクリニック開院、院長。げんき夢こども園理事、山梨県立大非常勤講師、全国病児保育協議会理事・山梨県支部長も務める。